

精薄幼児の教育



小溝きつ子

精神薄弱児ということばも最近では大分知れわたって私など他の人から「どんなお仕事をしていますか」と聞かれたとき精薄児(精神薄弱児の略)の教育をやっています」と答えても大抵の人が問い返さないでうなずいてくれるようになった。私がこの仕事を始めた昭和十四、五年頃は知識階級の人でも、このことばを知らない人が多くてよく問い返されたものである。一応知恵遅れであるといったこと位は分ってきたものの、その認識と理解の仕方においてはまだまだと言いたい。その証拠として參觀に来た一般の人たちは勿論、普通教育畠の先生たちの中にも、こうやって小さい中から教育すれば普通になるのかという質問をする人が往々ある。この時私は三木氏のことばをよく引用する。「言、ろう児の教育と同じですよ。盲学校では失われた視力を普通に見えるようにするのはないでしょう。視覚以外の健全な部分を特別な方法で教育して一人前の仕事ができるようにします。精薄児も全くそれと同じで胎内

または出産時、あるいは出生後何らかの原因で侵された脳を正常にするのでなく、その傷められた部分を使わなくてもできることを訓練し引伸して精薄児なりに一人前の仕事ができるようにしていくのです。」と説明することになっている。将来脳神経医学がもっと進歩すればあるいは医師の手で、ある精薄児は普通児になることもできるようになるかもしれないが、現在ではまだそれは望めない状態にある。

精薄児は知能の低いものをいうのであるがこの中に如何にも精薄児らしくみえる仮性精薄と最近精神医学界でとりあげられるようになった小児精神病があることに注意しなければならない。「仮性精薄児」とは本当は普通児でありながら環境がわるいために歪められて実力が出しきれないもの、視力、聴力が極度に悪いため学習困難のもの、言語や肢体が不自由のためにもっている能力を表現できないているこどもたちのことである。この子たちは脳は正常であるのだ

から環境を整えて情緒の安定をはかるか、身体の故障を治療するかしてやれば容易に普通児になることができる。

小児精神病は小児分裂病あるいは幼年性自閉症と言ひ、今までは精神薄弱児とみなされてきたわけでこのような子どもたちはいくら教育してもその効果は余り望めないのである。小児精神病とまでは病名はつけられないが精薄児プラス・アルファに該当するものは必ずまぎれて入学するので、この子たちに教師たちはとても手古摺るのである。

以上の精薄児外の子どもを除き、純粹の精薄児を対象として一クラスを編制した場合、どの子どもも異なっていて実に多種多様であることに気がつくのである。普通児においても個人差は勿論あることだが精薄児の場合はその開きが量的にも質的にも大である。だから子ども五人に對しひとりの先生という級も必然的にできてくるわけである。精薄児の中にも白痴、痴愚、魯鈍と知能の程度による段階がありそれぞれの段階においても理解力、運動能力、言語能力、表現能力、意欲の有無、興味の対象、社交性などに大きな開きが生じてくる。精薄児の原因に内因、外因という分類の仕方があって内因は個体発生以前、外因は胎内期、出産期、乳幼児期に問題があり、内因の方が外因の方より予後が良いと言われている。外因より内因の方が比較的バランスがとれているので外因より遙かに知能が劣っている場合でも内因の方が教育し易いように私も思う。以上

述べた知能の程度と原因ということの他に行動面にいろいろと正反對のものがいる。

終始動きまわっている興奮型と刺激を与えない限り一日中室内でじっとしている沈黙型がある。言語の面では相手かまわず、のべつなく喋べる多辯型と一日中でも黙々としている沈黙型がある。情緒の面では怖さや危険をしらない無鉄砲型と恐怖心の強すぎる用心型がある。社会性では未知の人でも誰彼となく話しかける社交過剰型と既知の人から話しかけられても無反応な非社交型、友だちを無暗に叩きまわる乱暴型と叩かれても一向に平気な無反応型とがある。

このように両極端に偏る傾向がある。これで大体、精薄児の集団は如何に種々雑多な様相を呈しているかは御理解ねがえと思う。今度は精薄児の特長というか、彼らの共通性について特に教育する上で困難と思われることにふれてみたい。

社会性の問題—おとなとの交渉はあるが友だち同志の交渉が殆どない。単独遊びが多く、グループでルールのある遊びは教師が入っても困難である。整列ができないし、並んで歩くと直ぐ乱れてしまう。

言語の問題—言語障害児が多くて聞きとりにくい。教師がことばだけで命令するときは分らないことが多い。ことばによる意志表示がない。応答は殆どない。出席調べの時の返事は可能だがその他の場面で名前をよばれても返事をしない。歌を教えても模倣しようとする。

しない。皆に話しかけると、めいめいが教師の話に注意を向けない。

周囲に無関心—周囲のでき事や変化に非常にうとく、ブドウの実が大きくなっても、きれいな花がさいても、銀杏の葉が散り始めても関心を示さない。好奇心や不思議がるとか疑問を抱くとかはなくて、すべて当然のこのようにしている。

固執癖がある—新しい経験に直面したとき円滑に入っていない。融通がきかないので臨機応変な行動はとられない。

自己統制力なし—勝手な行動が多くて集団的行動がとれない。気がむかないと全然手をつけないし、つけたと思っても直ぐ放り出す。集団の場から離れてしまうので大いに困る。

依存性が強い—家庭の教育が大いに影響しているのだが自主的に処理しようとしれない。消極的な拒否をするときは頑固で強いがおとなにとってしてほしい事に対する積極性はほとんどないし、意見の主張もない。

創造力、工夫力なし—積木、粘土などの教材や砂場で何かを作って遊ぶことはしない。ただ、いじり、投げる、持ち運ぶ、穴ほりをする程度である。

不器用—手先の仕事は下手で鉄の使い方、食事のし方、着物の着脱、ボタンはめ、手の洗ひ方、ふき方の指導に骨がおれる。

運動能力の未発達—前へならいで腕を前方に上げること、腰をか

がめて歩くこと、階段の昇りと特に降りがむつかしく、おくり足である。スキップや後向きに歩くことは非常に困難である。

注意集中しない—注意力非常に少なく、その時間も極めて短かい。理解の点で少しでも抽象的になると分らなくなる—数が最も不得手で、因果関係や物の比較、類似点は見出せない。出来得る限り、具体的にしないと分らない。

記憶力悪い—体験したことでも印象強かったと思われることでも記憶していないことがある。

次に共通して好ましいと思われる面を挙げることにする。それは知恵が遅れていることのために小賢しいところがなく悪知恵もないし、人の揚足をとることもない。感情方面では知能面ほどに正常児との開きがなく、愛情には敏感で思いやりもあれば親切なところもあり、怒ることもあれば嫉妬もする。がそのことを根にもって仕返しとか意地悪とかいじめるなどは絶対がない。至って善良な子どもたちである。これで精薄幼児のおよその輪郭は掴めたと思うが次にこのようなグループを編制して教育する場合私どもは何から手がけていけばよいかについて考えてみることにする。

養護学校へ入学するまでの親たちの辿ってきた道は誕生すぎてことばがでない、歩かないということに不安が始まり、病院巡りが開始されるのである。そこで母親がきかされることは、たいがい気休めに近いものである。精薄児であることをはっきりと知らせ、今後

の正しい指導を示してくれる医師にぶつかるまで不安と夢のような期待を抱いてあちこちの医師を訪ずれることになる。一方教育相談所や児童相談所を訪ずれて知能検査を受けると、精薄児か否かは大体分る。そこで母親たちは悲しい決心と期待を抱いて特殊教育を希望してくるわけである。私どもの方には幸い精薄児に関心のある医師がいるので、精密な身体検査と保護者との面接により生育歴を調べてもらい、医療を要する精薄児であるか否かを、また健康管理上の諸注意を指示してもらうのである。甲状腺障害、てんかん、ひきつけのあることどもたちには、医療と教育を並行しておこなうことが大切である。一方私どもも、こどもの胎内中、出産時、乳児期から現在までの病歴や育てるおとなの態度などをたずねて、どのような環境においてどんなふう育てられたかを調べ、後々の教育参考資料とするわけである。

入学以前に保護者を集め準備教育をする。先ず惨酷のようであるが精薄児は教育をしても決して普通児にはならないことをはっきり述べる。何故こんなむづかしいことを宣言するかというと親に気休めの希望を与えることは親の悩みをますます濃くするだけのことで、このことは病院遍歴の時のことを思い出してもらえばうなずけるはずである。その当座は頭に鉄槌でも下されたかの如く親の落胆もひどいが、やがては元気を取り戻し本人に最も適当とする処置をとろうとしてあらゆる努力をするわけである。一時の同情や慰めはかえ

って親子を不幸にすることになる。

かつておとなの頭を支配した今でも根強いものは教育すなわち読書、書き、算盤という考えである。教育のねらいは立派な人間教育で好ましい人格形成にあるはずである。今日普通教育においても知育偏重はうんぬんされているのである。まして精薄児が知的なものを学ぶためには、その侵された頭脳を使わねばならぬのだから精薄児にとつてこれほど気の毒なことはない。それよりも傷ついた脳を使わないでもすむような運動機能の訓練、感覚訓練、社会性、自己を統制する力、身辺の処理が自分でできるようにと教育指導していくことであろう。これらは学習する上において知的能力を余り必要としないから訓練如何によつてその教育効果を期待することができる。教育は対象が幼ければ幼いほど家庭の協力を必要とするが特に融通のきかない精薄児の場合は両親のこの教育に対する正しい理解と実行が大切で、もし教師が学校だけで如何に骨を折ったとしても家庭の協力がなければ教育のじゅうぶんな効果は望めない。最近ではこどもの教育よりも先ず周りのおとなを教育することが私は先決問題であることを信じる。おとなに対する教育が成功すれば自ずとこどもにも効果が現われてくるのである。私どもの教室での教育が家庭でぶちこわされないように保護者に注意を喚起し耐ゆまざる協力を約束する。

これはいよいよ教室での教育が始まるわけだが今までは全く母親

と一心同体で親の庇護のもとにいたことも親から離れて自主の勉強をしなければならぬ。こどもたちの依存性をなくし自主的になるように仕向けていくことに重点をおいて保育をするのであるが、それには各自の身辺の処理を通して指導していくことにしている。今まで鼻汁が出たといえばかんでもらい、手は洗ってもらうという具合に自分の手はあっても使うことをせず、母の手によって悉く処理されてきたのである。手先は元来不器用な上に練習の機会がないので、ますます自分の手は何もできなくなってしまう。がしかし、これからは自分の手を何としても動かさなければならぬ。それには先ずこどもたちに意欲をおこさせることである。操作のし易いもの、こどもの能力に適應するものをあてがうように配慮することが大切である。例えば靴は足を入れればすっと入るようなものを、洋服は後ボタン、肩ボタンなしで前開きのものを、ボタンの形は中央が凹んで余り小さくないもの、衿はなしで袖ぐりが広くて腕の通し易いものをあてがうのである。精薄児は少しでも困難に遭遇すると直ぐ中止して放り出してしまふからである。また自分でやってみようという気持ちに追い込むには少しの成功も見逃さないか褒めてやることである。情緒の面では彼らも正常児と変わらないから、ますます自信を得て成功感を味わおうとして何回となく練習するようになり、その結果、熟練して操作も早く上手になる。この過程においてのおとなの手の出し方であるが、こどもができてそうなこ

とを手伝おうとしたり、こどもの能力からみて、むつかしすぎることを無理にさせようとしたりして折角の意欲をつみとったり自信をなくしたりしないことである。

も一つおとなの態度として注意しなければならぬことはこどもの要求を先廻りして叶えてやることについてである。殊に精薄児の親はこどもを不憫がることからこのような事が非常に多いがこれではいつまでも自主的にならない。ちよつと声を出せば、ちよつと目を動かせば、それだけで自分の欲望が次々と満たされるとしたら、正しいことばの意志表示ができないのは当然のことである。ことばは出さないがおとなの言うことは分るのでことばの練習をしてもらいたいという親がいるが、これは大半は親の責任にある。折角の練習の機会をむざむざと取り逃しているわけで、この場合に言わせようとするはこどもは要求を入れてもらいたいばかりに口を開いて言おうとするに違いない。こどもがもしコップを指したとしたり、この時こそ「コップ」とか「コップを下さい」とかこどもの能力に応じて言わせてから要求をみたしてやることである。普通の幼児よりも、もっと末分化な精薄の幼児に学校の教育でおこなうような改まった学習方法では絶対についてこない。日常生活の中にそういう機会を多くつくることである。要するに精薄児教育はあせらずゆったりと怠けないうこどもの気持や考えをよくくみとって根気強く努力することである。

(愛育養護学校)